

青梅市文化財ニュース

第 7 号

昭和63年 3月19日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

明治22年に、大門、今寺、藤橋、今井、木野下、谷野、塩船、吹上、根ヶ布、師岡、野上、新町の各村々が合併して西多摩郡霞村が誕生しました。そして、昭和26年に青梅町、調布村とともに旧青梅市となりました。広大な面積を持つ霞地区は現青梅市の東南部に位置し、北は小曾木地区との境界をなす霞丘陵が連なり、その山すそに通称“木野下田んぼ”と呼ばれる市内最大の水田地帯、さらにその南の台地は“かすみっ原”と呼ばれる畑地となり、その東方には新町の雑木林が続いています。昭和30年代までは典型的な純農村でしたが、この広い農地は高度成長期以後、急速に宅地化が進んできており、これからもさらに変わって行くことでしょう。

地区内を西から東へ貫流する霞川の両岸には先史時代から人々が居住し、その遺跡がいくつも発見されています。また、中世には豪族、三田氏の居城が師岡に築かれたため、その史跡が残っています。さらに近世に至って新町の開村などもあって、それらに関わる文化遺産が数多く残っています。

そこで霞地区の文化財の紹介は、まず根ヶ布の〔虎柏神社〕から出発します。勝沼城主三田氏の厚信を受けた由緒ある神社です。うっそうたる大樹におおわれた境域は旧郷社の社格いふさわしく落ちついた雰囲気があります。また毎年、8月28日に行われる例祭、お諏訪さま草相撲はよく知られています。ここから、ひとつ尾根を隔てると曹洞宗の名〔天寧寺〕、にはめずらしい整然とした七堂伽藍が訪れる人の目を引きつけます。やはり三田氏の開基によるもので何度かの火災を受けていますが現存するものは江戸時代中期再建の本堂、禅堂、中雀門、末期の総門や鐘楼です。そして境域全体が東京都指定の史跡になっています。また、本堂の裏にある〔霞の池〕はいつも水をたたえて、そこから流れだした水が霞川となり、あたりを潤し文化を育んできました。今はゴルフ場になっている尾根道に出て南に進むと〔勝沼城跡〕三田氏の居城があり、空堀、堀切、土塁などが中世城郭の遺構をよく留めています。雑木におお

れた城跡を歩くと「兵者^{つわもの}どもが夢のあと」の感にひたることができます。城に隣接する師岡神社の境内にある〔師岡神社のシイの木〕の大樹は世々の移ろいを見つめてきたことでしょう。都道に出て東へ進み、吹上の切り通しをぬけると前方に東京都指定天然記念物〔宗泉寺の大カヤ〕が望めます。五日市町、広徳寺のカヤとともに全都で最大級のもんです。晩秋には、カヤの実をたくさん落とします。

〔花みごろ〕市指定天然記念物『梅岩寺のシダレザクラ』とその姉妹樹といわれる金剛寺のシダレザクラは毎年4月10日前後に満開になります。夜つゆをとどめてしっとりした早朝の花には静寂の美があり、いっぽう、暮れなずむ境内に浮かぶ花にはあでやかさがあります。明日ありと思うことなく、どうぞお出かけください。

(文責 橋上一彦)